

特別寄稿

ルビコン川を渡る新島襄 風間浦からのスタート

風間浦・同志社の交流30周年に寄せて

元大学神学部教授

本井 康博
もとい やすひろ

本州最北端の村

風間浦は「本州最北端の村」を自賛する。それだけに京都からは遠い。「いいどこだして来てけろ」と誘われても、「ほなら」と簡単には応じられない。

昨年10月、「新島襄寄港の地碑」(以下、寄港碑。写真⑤)建立30周年記念の講演に呼ばれました。一番近い空港が函館なので、北海道経由です。2012年の20周年記念のイベントの際も、やはり同じコースでした。

風間浦は青森県下北郡、というよりも下北半島先端です。全国的に馴染みのある下北の観光地は、大間、恐山、下風呂温泉。マグロの大間、イタコ(巫女)の恐山と並んで、本州最北端の温泉を誇るのが風間浦です。隣接する大間は、函館と90分のフェリーで結ばれていて、北海道の山並みが視界に入るばかりか、テレビも北海道圏です。

青森と同志社

北海道並みの遠距離にもかかわらず、なぜ同志社と交流があるのか。起点は新島襄の下風呂温泉入浴です。同地の講演ではそれが不可避のテーマですが、話題はそれだけではありません。

前回の講演もそうでした。時期は2012年の秋、ちょうど大河ドラマ「八重の桜」が全国放映される3か月前でした。世間では「八重って誰？」が飛び交っていましたので、斗南藩と新島八重の関係にも言及しました。

戊辰戦争で敗北した会津藩は、勝ち組の薩長等が立ち上げた新政府により藩を取りつぶされ、下北半島(今のむつ市周辺)へ「移封」されました。こうして青森の地に突如出現したのが斗南藩です。故郷を棄てて移住させられた会津の人たちは、慣れない荒蕪地の開拓に苦闘しました。

幸か不幸か山本家(覚馬や八重)は転住を免れましたので、新島夫妻が揃って下北縁の人になる可能性はゼロでした。

もしも八重が下北に移住していたら、「八重の桜」の展開も違っていたはずです。

私が「八重の桜」の時代考証を依頼された時には、斗南藩抜き筋がすでに決まっていました。



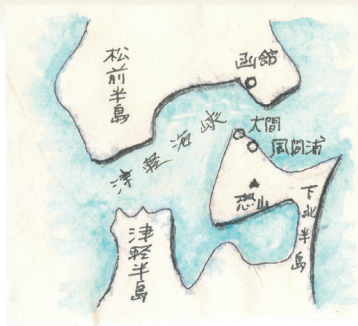
①風間浦中から同志社中へ

未踏の地、青森

私が風間浦を初めて訪れたのは、2005年。京都育ちの私は、学生時代の北限が仙台という奥手でした。それが6代になって、下北に行く要務が生じました。

1990年代から同志社の資料室(現社史資料センター)で学芸員めいた業務に従事していた私は、2004年に神学部と呼ばれ、同志社史や新島襄を扱う「同志社科目」担当教員になりました。

以後、職務的にも新島が訪ねた所はすべて現地調査をすべきだと思い、さっそく下北半島に足を延ばしました。函館空港からまずは波止場の「新島襄海外渡航乗船之处」碑(以後、渡航碑。写真③)に直行しました。ここは半世紀前からすでに両三度、視察済です。一方、近くの新島ブロンズ像(2002年制作。写真④)とは、この時が初対面です。



②風間浦村ってどこ (本井作成)
津軽海峡に臨む風間浦村は、緯度的には北海道(松前半島)の南端よりも北にある。

実は像を企画した函館市は、あらかじめ同志社に新島の体格の数値を聞いてきました。啄木座像(1958年、市内啄木小公園)が等身大だったからか、新島も同じく実物大で作ったかったのだ

しようね。

この手の難問の回答も、私の職務でした。新島が留学した大学が毎年、学生の身体測定をしているのが幸いし、彼はノートの片隅に身長(フィート)と体重(ポンド)を生涯でただ一度だけ書き込んでいます。164cm、55.7kgです。今の私よりも一回り小さい数値です。

ですが、波止場で横に並んでみると、私よりはるかに大きい(写真④)。像の名前がなぜか「記念撮影」なので、いっそのこともっと大きくすればずっと「インスタ映え」するの、と思います。

寄港碑は風間浦だけ

それから海峡を渡って、初の風間浦です。函館の渡航碑に対峙するかのように同村の「いさり火公園」内に1992年に建てられたのが、寄港碑です。すでに30年を経て今ではすっかり風景に溶け込んでいます。が、よくよく考えると、そこにあるのがきわめて不思議です。

ひとつは新島の存在感です。同じ公園のすぐ近くに立つ井上靖の「文学碑」(写真⑦)に比べると、知名度もアピール度も桁違いです。村内では寄港碑の建設に際して当初「新島ジョーってどこ?」と城に間違われたり、「同志社は何の会社?」といった質問が出ました。

さらにもっと不思議なことに、新島の寄港地はなにもここだけじゃありません。彼は生涯で2度、船で世界一周していますから、寄港地を全部挙げたらすごい数になります。なのに、碑が立っているのは世界でここだけです。

函館航海途上の寄港地

新島が密出国する時の国内航路（江戸から函館まで）だけを見てもらうです。乗船した快風丸は、彼が仕えた上州安中藩の本家にあたる備中松山藩（現岡山県高梁市）が交易のために購入した洋式帆船でした。

後年の彼の回顧によれば、快風丸は、「函館までの途中、松山藩主の商品の積みおろしのため、あちこちに寄港した」（『新島襄全集』10巻41頁。以下、⑩41）。たしかに品川を出港してすぐに浦賀に停泊、そして房総半島を廻つてからは暴風や逆風を避けるために興津（千葉県）や砂子ノ浦（同）に緊急避難。ついで中之作（福島県いわき）に寄つてから宮古（岩手県）、そして最後が風間浦です。

このうち風間浦との関係度が抜群かというところ、そうでも



③新島襄海外渡航の碑
(2022年10月29日撮影)

1954年に函館市に建立。まもなく70年を迎える。

ありません。予定外の停泊ですから、むしろ正反對です。ほとんどの港では船が2泊から数日間停泊する間、新島は上陸して入浴、食事（飲酒?）、宿泊しております。最も長いのは宮古（風ヶ崎）で、数日、滞在してい

ます。対して風間浦の場合、停泊期間が最短のうえ、陸に上がつて入浴や食事はしても宿泊はしていません。2日にわたって船から2度、下風呂温泉に通っただけです。宿泊は船内でした。

これが避暑や避寒となると、その差はもつと拡大します。国内だけでも札幌や伊香保、山形、瀬戸内などで休暇を過ごし、中には1か月以上も滞在しています。けれども、それほどの長期滞在でも新島の碑はどこにも立っておりません。

最初の一步

この矛盾を問題にした人は、かつていません。で、今回はあえて、いや無謀にも、言うべきでしょうが、挑戦してみます。

他の地域と風間浦が明白に違うのは、関係者、とくに地元の姿勢です。同志社の卒業生（同志社校友会青森県支部）の熱意と村役場や村議会の理解と支援は突出しています。

そもその火付け役は、今から60年前の1962年夏に風間浦を訪問した久永省一氏です。温泉目当てではなく、純粹に新島研究のために交通不便なこの地をあえて訪ねた最初の同志社関係者です。氏はその時の紀行文を「下風呂にて」と題して本誌創刊号（1962年11月）に寄稿しました。下風呂（風間浦）の同志社デビューです。

後に氏はこれを「東北紀行」新島先生の踏み跡をたどって」と改題して、自著の『同志社で話したこと書いたこと』（洛北書房、1975年）に収録しました。

このエッセイは卒業生、とりわけ青森県の出身者・在住



④新島襄ブロンズ像（同前）
像と筆者とを比較すると、像は等身大よりひと回り大きい。

たというわけです。

もしも氏が高校教員の時に下北を訪ねていたら、生徒の私は学校の礼拝か授業で風間浦の土産話をリアルタイムに伺えたでしょうね。

久永氏の一文に刺激を受けて村との交流に尽力した同志社職員がいます。資料室長の河野仁昭氏です。氏は大学で学ぶ留学生たちを村に同伴し、村の小学生との交流に意欲的でした。訪問は10回を越えました。

実は神学部教員になる前、私は同氏の後任として資料室に入り、新島関連の仕事を引き継ぎましたので、氏の働きは当然、承知しておりました。ですから風間浦情報も早くからゲットできました。

者が新島の下北寄港に関心を抱くきっかけになりました。これが建碑への第一歩です。

ちなみに、私は久永氏から同志社高校で英語を教わりました。その後、氏は同志社中学校（以下、同中）の校長になり、その間に風間浦を訪ね

なぜ風間浦だけに

その後、久永エッセイに触発された同志社校友会青森県支部が、風間浦村に建碑の要請をしました。そのことは、かつて寄港碑の除幕式（1992年）で幕を引いた4人の中に、佐藤嘉悦支部長が含まれていることから明白です。ちなみに他の3人は小野慎一村長、杉山勉村議会議長、松山義則同志社総長です。

このラインアップからも窺えるように、寄港碑は村と同志社とのコラボ作品です。河野氏は、碑が出来たことをさっそく学内機関誌などで矢継ぎ早に学内外に報じました。こうして寄港碑はしだいに同志社関係者に認知され始めます。これと対照的なのが、横浜のケースです。新島が出国した函館港に渡航碑があるのですから、帰国した横浜港に帰国碑があっても当然というので、同志社校友会神奈川県支部はかつて市に働きかけました。市の協力が得られなかったため、いまだに碑はありません。

代わりに新島が客船（コロラド号）から降り立った埠頭（ふ頭）近くに桜を植樹するのが、精一杯でした。

植樹式には私も同志社総長のお供をして参加しましたが、現場のプレートには同志社の名前を出さない、という条件が付けられたそうです。地元行政の理解が得られた風間浦の場合とは、雲泥の差ですね。

風間浦の独自性

風間浦だけに寄港碑が建立された理由は、関係者の貢献



⑤新島襄寄港碑（2022年10月30日、本井撮影）
1992年の除幕式では地元2名、同志社2
名が揃って除幕した。

や協力のほかにもあると思います。碑の建立に尽力した当事者の思惑や期待にはなかったかもしれませんが、現時点で振り返ってみると、独自の要因が介在していたように私には思われてなりません。

何かと言いますと、風間浦の地理的環境です。他の寄港地と決定的に違っているのが海峡の存在です。

津軽海峡に着目すると、新島が置かれた当時の立場がよく窺えます。彼はゴール（函館）寸前に海峡の壁に阻まれたために、最後の関門を痛烈に意識させられたと思われる。

江戸に生まれ、江戸で育った関東人（上州人）の新島は、それまで本州から出たことはありません。西日本でもせいぜい備中（岡山県）止まりです。まして東北はすべて未踏の地でした。そうした彼にとっては、風間浦は本州の出口です。ここを抜け出せば待っているのは蝦夷、そう当時の新島にとっては異国に近い外地ではなかったでしょうか。海

峡はそこへ至る最後のハードルでした。それだけにここを渡るか渡らないかで、その後の人生が大きく変わってきます。

渡る場合は、その延長線上に密出国という大冒険が待ち受けています。それは一族にも累を及ぼす

犯罪行為に他なりません。家族の安全を守り、危険を回避するためには、ここで引き返す手もあります。

ですが、新島はあくまでも不退転の決断を改めて下します。後年の回想では、「外国への逃亡」という「危ない冒険」に「命を賭ける」決断をしたのは、「少年之狂気」を牽制できなかったから、と告白しております（⑩39、45、63。③21、23、27）。さらにアメリカに着いてからも父親に向かって、そうした「大胆の兄」、「不忠不孝の兄」を持ったことを「御身の不幸」と諦めてほしい、と詫びています（③28）。

津軽海峡はさしずめルビコン川

ところで風間浦に上陸し温泉に入浴するのは、新島には想定外の行動でした。潮の流れと風の都合で船が海峡を渡れないために、やむなく停泊を余儀なくされたからです。

新島は足止めを食らったこの地で、最後の関門をくぐり抜けることに逡巡はなかったのか。決断に揺れがなかったのか。彼には津軽海峡はさしずめルビコン川ではなかった



⑥新島襄寄港碑前の式典参加者
（2022年10月31日撮影、風間浦村提供）
毎年、風間浦村と同志社は共同でイベントを実施する。

でしようか。渡ってはいけない海峡であると同時に、渡らなければならぬ海峡でもありましたから。

「ルビコン川を渡る」とは、後戻りできない道へ一步を踏み出す、あるいはその決断を下すことです。古代ローマのカエサル（シーザー）が、BC 49 年に元老院令（違反の場合は死罪）を無視して軍を率いてルビコン川を渡り、ガリヤへと進軍した故事に由来する言葉です。

新島は函館を目前にした津軽海峡で足止めを食らい、密出国する判断と行為を予期せぬ形で再度、問われたはずです。その結果、出した答えが「Go」でした。

後に同志社校長として学生たちを激励した言葉で言えば、「進メ進メ好男子、決シテ退歩ノ策ヲ為ス勿レ」（③468）^①あり、「Go, go, go in peace.」（拙著『ひつりは大切』190 頁）^②とすね。

「賽は投げられた」

ところでルビコン川を渡る時、シーザーは「賽は投げられた」と叫んだといひます。風間浦は、新島が人生で唯一、賽（サイコロ）を振って博打を試みた場になりました。一か八かのギャンブルは、サイコロの目が偶数（丁）に転ぶか、奇数（半）に転ぶか、「丁か半か」で決まります。おみくじで言えば、吉と出るか凶と出るか、です。

それ以後の人生を見ますと、下北での新島の大勝負は明らかに吉、いや大吉でした。その意味で、彼にとって風間浦は他の寄港地では得難い巡り合わせをもたらしてくれた点で、さながらパワースポットです。

「風間浦&函館」が分水嶺

この視点から彼の人生を読み解いてみます。ほぼ47年に及んだ新島の生涯は、3 期に分かれます。第1期（1843 年～64 年、江戸）、第2期（1864 年～74 年、海外）、第3期（1874 年～90 年、京都）で、それぞれの活動場所に応じて、身分や名前も異なります。

ところが、2 期と3 期は身分と名前の面で決定的な差異はなく連続的であるのに対し、1 期と2 期は明らかに断絶しています。もしも生涯を2 分する分水嶺があるとしたら、1864 年の函館からの密出国です。

その場合、函館と風間浦をワンセットにして考えたいというのが、私の仮説です。地理的にこそ両者は海峡で分断されていますが、海峡をルビコン川に見立てると精神的には連続性が見られます。

新島が見限った「旧世界」の出口は、とりもなおさず自由な「新世界」への入口でした。それを象徴するのが川の兩岸に立つ彼の碑、すなわ



⑦井上靖文学碑（2022年10月30日撮影、本井撮影）
碑文は井上の自筆。寄港碑と違い、定期的に碑前で式典が行われるわけでもない。

ち函館の渡航碑と風間浦の寄港碑です。寄港碑自体が珍しいうえに両サイドに對として碑がふたつ建てられているのも、ここだけです。

井上靖「文学碑」

さらに他にはない独自性があります。同じ公園に別の碑（井上靖の文学碑）が建てられているのも、新島の碑としては類がない。井上は小説『海峡』（1958年）の最終章を当地の長谷旅館（先年廃業）で書き上げました。

村は村制施行100周年を記念してこの碑を建立しました。寄港碑と同じ場所に建てられていますので、「寄港碑&渡航碑」と同様に「寄港碑&文学碑」をセットにすると興味深い繋がりが見えてきます。

新島と井上は異世代ですので、個人的交渉は絶無です。海峡を見る目にも差があります。津軽海峡は井上（生まれは旭川）を詩人にし、新島（関東人）を冒険者にしました。しかし、同志社・京都と井上との関係に絞ると、いくつかの接点が見出されます。

井上は京大の卒業生、そして夫人（旧姓足立ふみ）は京大教授の娘です。彼女は誕生が京大近くのうえ、同志社の「女専」で学びます。高等女子部から女子専門部（英文科）に進みますが、病氣のために中退。その後、京大生の井上



⑧文学碑竣工式

（1989年9月30日撮影、風間浦中学校提供）
井上靖・ふみ夫妻（中央）と風間浦中学生たち。

締めは風間浦で

最後に注目したいのは、風間浦中学校（以下、風中）の校訓のひとつ「友愛」です。

寄港碑建立以後の30年間、風間浦と同志社との交流の「精華」は、風中と同志社中学校（以下、同中）との交流です。私は同中OBだけに、とくにうれしいです。

生徒間の交流だけでなく、風中は「村の木」（青森ひば）（写真⑨）を、同中は新島ゆかりのカタルパをそれぞれ相手校に植樹しています。

交流の背景には地元側では寄港碑建設の立役者、越膳泰彦氏（元企画財務課長、前教育長）、同中では竹山幸男副校長の働きが不可欠でした。越膳氏は今回の式典で同志社

と結婚し、京大の傍で新婚生活を送ります。井上夫妻が文学碑の打ち合わせや除幕式（1989年、写真⑧）のために風間浦を訪ねた3年後にその碑の近くに新島の寄港碑が竣工するのは、なんとも奇遇です。相前後して風間浦に生まれたふたつの碑は、井上夫人により赤い糸で結び合わされたのも同然です。

夫妻と同志社に関する秘話をひとつ。1984年3月、京都での国際ペン大会で井上は児玉実英会員（同志社女子大学教授。後に学長）に会った際、同伴した夫人を「これは女専卒」と紹介しています。



⑨記念植樹（2010年10月1日撮影、同志社中学校提供）

宿志館（岩倉校地）東に植えられた「風間浦村の木」（青森ひば）。

これ以前にも、大学京田辺校地（恵道館脇）に青森ひばが植えられた。

から感謝状を授与され、一方の竹山氏は村から風間浦村ふるさと大使に任命されています。

同志社での風間浦の知名度は、イマイチです。たとえば現在、本学図書館は「新島襄ゆかりの地をめぐる旅」と題した展示をしています。風間浦が抜けています。「こちらあかんわ」と思って展示あいさつ文を読み返してみると、利用した参考文献として私の『新島襄と建学精神』『同志社科目』テキスト（同志社大学出版部、2005年）が挙がっているじゃないですか。同書にはもちろん寄港碑のこととちゃんと入れております。ですが、「津軽海峡はさながらルビコン川！」と強調しなかったために展示ではスルーされたようです。力不足を痛感しました。

「津軽海峡・冬景色」によって有名になった津軽半島の竜飛岬（龍飛崎）に負けないように、下北半島の大間崎や風間浦の知名度もあげたいものです。さっそく2023年3月の「同志社を語る会」という学内集会では、風間浦をテーマにした懇談をしたいと企てています。

友愛、永久にあれ！

結論です。同中には「風間浦ルーム」があり、風中から毎年贈られた記念品が飾られています。中でも私のお気に入り、中央のハート部分に「同志社 風間浦 Forever」と記された木工品（写真①）です。

同じく風中にも「同志社交流ルーム」があり、同中生が贈った品物が陳列してあります。その中にも、中央にFriendshipと記された木工品があります。

これら両作品に共通に込められた「友愛」の言葉通り、今後とも両校の友好関係が末永く続いてほしいものです。

その願いを込めて、今回の風間浦訪問に際して私は新島に関する拙著の中から20冊ほどを選んで持参しました。毎年、同志社が実施する新島襄懸賞論文コンクールに風中生が応募する際、参考書として使ってもらいたいからです。私は審査員として毎年、応募作品を読みますが、風中生はこれまでに中学校の部で最優秀賞を2回も受賞しています。同志社との距離や環境、同志社中学校との条件の違いを考えると、これはスゴイことです。それだけに入賞作品が風中職員室脇の廊下に張り出されているのを今回「発見」して、うれしかったです。

先生方のご指導に敬意を表すると同時に、生徒にも今後の健闘を祈りながら風中を後にしました。帰路、津軽海峡を北上しながら、158年前に同じ海峡を渡った新島青年の緊張感と心意気に想いを馳せておりました。

（2022年11月28日）